

平成30年度

江川小だより

学力特集号

平成30年10月22日
北九州市立江川小学校
校長 小椎葉 義明

平成30年度 全国学力・学習状況調査の結果の報告と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

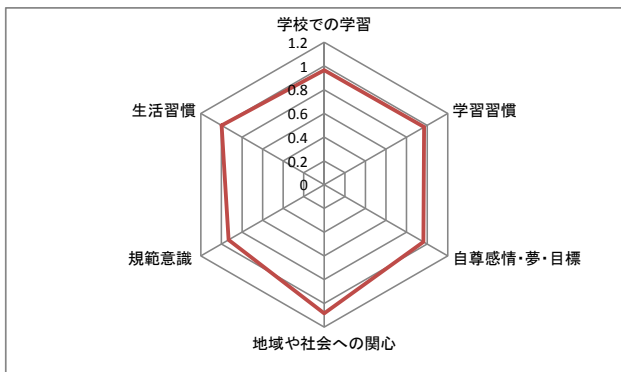
学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 教科に関する調査結果の概要

教科・区分	学力調査の分析(傾向や特徴)	全国平均正答率との比較
国語A	全体的に見れば、全国・本市と本校との平均正答率の差はあまりない。傾向としては、「言語についての知識・理解・技能」の面に課題がある。また、特徴としては「選択式の問題」より、「短答式の問題」に苦手意識が見られる。	下回っている
国語B	全国・本市と本校との平均正答率の差は、国語Aに比べるとやや広がっている。傾向としては、「書く能力」「読む能力」の面に課題がある。また、特徴としては「選択式の問題」より、「記述式の問題」に苦手意識が見られる。	下回っている
算数A	全体的に見れば、全国・本市と本校との平均正答率の差はあまりない。傾向としては、「図形」「数量関係」の領域に課題がある。その結果が、「数量や図形についての技能」の正答率の低さに表れている。	下回っている
算数B	全国・本市と本校との平均正答率の差は、算数Aに比べるとやや広がっている。傾向としては、「数と計算」「量と測定」「図形」の領域に課題がある。また、特徴としては記述式の問題に苦手意識が見られる。	下回っている
理科	全体的に見れば、全国・本市と本校との平均正答率の差はあまりない。傾向として、「自然現象への関心・意欲・態度」、「観察・実験の技能」の観点では、全国や本市の平均正答率を上回っていた。また、特徴としては短答式の問題は正答率が高く、記述式の問題に苦手意識が見られる。	下回っている

2. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> 学校の宿題については、取り組む割合が少しずつ増えてきている。 朝食をとってくる児童が確実に増えてきている。 比較的新しい地域もあるが、地域行事への関心は高い。 友達や周りの人の為に役に立ちたいという意識の高まりは見受けられる。 決まった就寝時間を守るなど、生活習慣の大切さを促す必要がある。 「話し合う活動」を漫然と取り入れるのではなく、その効果や広がりや重きを置いた取り組みが必要である。 自尊感情を高め、将来に「夢」や「希望」を持てるような取り組みを計画的に進めなければならない。

3. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

「学習の流れ」(わかる授業づくり5つのポイント)を徹底し、全教職員が一時間一時間の学習の大切さについての共通理解を深め、「めあて」～「ふりかえり」の流れを大切に授業を目指す。

- 学習後、子どもたちがどのくらい理解できたか診断テストでチェックし、できていない内容は補充学習をするなどして学習内容の定着を図る。
- 全学年において、「話し合う活動」を取り入れた授業を効率的に行い、子どもたち一人一人の思考の広がりや理解の深まりを目指す。

② 家庭生活習慣等に関する取組

「家庭学習のすすめ」を配布し、家庭学習の必要性を継続して啓発していくなどして、子どもたちが自主的に家庭学習に取り組むように家庭の支援をお願いする。

- 全学年で、家庭学習の項目を統一。「国語・算数・自主学習」の三つを必ず毎日出すようにする。ただし、自主学習に於いては、学年の発達段階に応じて、内容を精選する。
- 小中が連携した取組を進めるために、学力向上についての小中合同研修会の機会を増やし、共通理解を図る。